
2020 年 11 月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

教区だより

特別号

Vol.7

「今、この時に、親鸞聖人に会う」
「そのままの救い」

北海道教区北第3組即信寺 かめがい 亀谷 すすむ 亨 氏

◎『教区だより』特別号 について

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、『教区だより』は通常の編集体制が取れなくなったため、5月より京都教務所の編集責任により、「特別号」を発行しております。

通常の体制に戻るまでの間、引き続き特別号というかたちで発行してまいりますので、教区の皆様には、ご理解いただきますようお願いいたします。

『教区だより』特別号の発行について

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなった現実に直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思っています。

このような願いから、京都教務所では「今、この時に、親鸞聖人に会う」というテーマのもと、『教区だより』特別号を発行してまいります。

京都教区教化委員長 日野 隆文

「今、この時に、親鸞聖人に会う」

「そのままの救い」

北海道教区北第3組即信寺住職 亀谷 亨

裏も表も私の人生

最初に、北海道名寄市の名畑格氏（いなる）が、『サング』二〇二〇年七月号に執筆された一文を引用し、ご紹介させていただきます。

「私を抱いてほしい」

この言葉は末期ガンに苦しむお母さんに、家族の方がその苦しんでいる姿を見るに耐えかね、「お母さん欲しいものは何?」「して欲しいことは何?」とたずねた時、お母さんが答えた言葉です。子どもたちは「メロンが食べたい、背中をさすって欲しい」等々、いろいろな返事を想像していました。どれでも応えるつもりでした。しかしお母さんはたった一言、「抱いてほしい」と答えました。

(中略)少しの沈黙のあと、お父さんがベッドに上がり、うしろからギュッと抱きしめられたそうです。

(中略)私は想像しました。後ろからギュッと抱くお父さんの腕の強さと、抱く

腕に伝わるお母さんの体の温かさ。長い人生の、言葉にならない悲喜の詰まった「時」だったでしょう。

この文は人生の下り坂を迎えている私の心に強く浸み渡りました。そしてふっと良寛の「裏を見せ表を見せて散るもみじ」の一句が浮かびました。紅葉の終わりには色づいた葉が裏も表も見せながらひらひらと散っていきます。良寛はその光景を見ながら人間も同じであると感じられたのでしょうか。もみじの葉が裏も表もさらして散っていくように、「人生もまたそれ以外に無く、それで完結なのだ」と問いかけているように思えます。

しかし私たちは、裏の愚かな部分は隠し、表のいいところだけつなぎ合わせて人生を飾って、それを生きた証あかしにしようとしてしまします。若いうちはそういうごまかしも少しは可能かもしれませんが、このお母さんは末期ガンの病床にあって表の部分が奪い取られることを通して、裏としか思えないこの姿が自分自身そのものだと感じられたのかもしれません。その現実に立たされたときに「裏も表も私の人生、その全部をかけがえのない生の営みだったと心からうなずきたい」という叫びにも似た思いが「私を抱いてほしい」という言葉になったのだと思います。

人間の切なるつぶやきに応えるもの

名畑氏は続けられます。

私はしばらくこの「抱いてほしい」という言葉を考え続けました。この言葉は私たち誰もが、生まれてきてからこの奥底で、ずっと願って来た言葉ではなかったのかと。

(中略) 苦悩に憂^{うれ}い、悲しみに心引き裂かれながら、目の前のできごとに右往左往しているのが、私たちの日常生活です。歩いてきた人生を、そして自分自身を、まったく受けとめることなく、受け入れてくれる人や場所を求めて、彷徨^{さまよ}っているのが私です。

しかし、もし「私のすべてをへ抱いてほしい×受けとめてほしい」と言うことができたなら、強く抱きしめてくれる存在やその温かさを感じとれるなら、かえって私たちは、自分自身を受けとめ、自分自身を抱きしめることができるのではないのでしょうか。もう受け入れてもらうことを必要としないくらいに。

文を読みながら、裏も表も含めてこの私を丸ごと、ありのままそのまますを受け入れてほしいという人間の切なるつぶやきに応える

ものとして「弥陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず」(『歎異抄』聖典六二六頁)という教えが開かれたのだと思いました。本願とは阿弥陀仏が勝手に起こしたのではなく、本願の救いを求めているのは、私自身なのでした。私の願いに応えたのが本願だったのです。そして本願はすでに成就されているというのです。これはどういうことでしょうか。

すでに受け入れられ続けていた事実

あるご住職がお孫さんを抱っこしているときに「ああ私もこうやって抱かれてきたのだ。自分ではまったく覚えはないけれど、七十六歳の今日まで歩んでこられたのは、こうやって抱かれ続けてきたからだ」と強く感じられたそうです。人生においては、受け入れられたことも受け入れられなかったこともあったでしょう。傷つけたことも傷つけられたことも。しかし、今日まで生きてこられたということは、無数の縁に抱かれ続け、教えられ続け、育てられ続けてきたからこそなんだと実感されたというのです。

裏も表も含めてすべてが私の支えであり、導きであり教えであった。私の思いを越えたはたらきの中で私の人生は運ばれてきた。そ

こに、受け入れてくれる存在を私が求めるに先立って、すでに受け入れられ続けていた事実が「強く抱きしめてくれる存在やその温かさ」の具体性であり、その事実を実感した驚きが南無阿弥陀仏なのです。

いのちからのつぶやきを聞く

新型コロナウイルスの問題は、人間感覚からすれば「裏」としか思えませんが、この現実もまた、私たち人間のありようを問い続け、教え続け、導き続けている縁なのです。ウイルス感染拡大の中、「失われた日常」とか「日常を取り戻す」ということが言われます。そう言わざるを得ない現実も十分理解できます。しかし、コロナ以前も今も無数の縁に抱かれつづけていることに変わりはありません。そのことを見失っては、たとえ日常が取り戻せたとしてもそれは「迷いの日常」に戻るだけなのでしょう。

日々の生活が「迷いの日常」で終わるのか、抱かれ続けているという事実への「目覚めの機縁」となるのか、それはまさに「私のすべてを抱いてほしい」といういのちからのつぶやきを聞くところから始まるのだと感じています。

教務所からのお知らせ

《得度》

二〇二〇年十月七日付

近江第二組 教誓寺 南部 奈美栄

〔敬称略〕

《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

近江第二組 善念寺前坊守 治田 康子

二〇二〇年八月一日 九十六歳

近江第二組 願林寺住職 中野 義晃

二〇二〇年九月九日 八十五歳

若狭第一組 眞宗寺住職 眞木 康則

二〇二〇年八月二十七日 七十二歳

〔敬称略〕

《常磐会館報恩講について》

毎年たくさんの方にご参詣いただいております常磐会館報恩講ですが、本年は新型コロナウイルス感染症の感染防止対応のため、会場である大講堂の座席数が限られることから、常磐会館責任役員・総代を中心とした内勤めとします。誠に残念ながら毎年のようなご参詣はいただけません。ご了承ください。

なお、後日、藤元雅文氏(大谷大学准教授)の法話動画を京都教区ホームページにて配信する予定です。

《法話動画の配信について》

京都教区ホームページにて法話動画を配信しております。今後も随時アップロードしてまいりますので、視聴ください。



※毎月掲載しております、「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

駐在日記

すっかり忘れてしまっていたが、シャープからマスク当選のメールが届いた。第21回目抽選での当選。当選確率は毎回約100分の1。今さらではあるが「当選」の文字に嬉しさが込み上げる▼応募したのはたしかゴールデンウィークに突入する前だった。コロナ禍を機に一時は巷からマスクが消え、外国産でも一枚100円が相場となっていた▼インターネット通販で、子ども用になんとか注文し届いたマスクを開け、梱包のガサツさに絶句した苦い経験も思い出される。曇ったナイロン袋に「取りあえず」詰め込まれていたマスク。「検品済」と記されていたが、この状態で検品済であるのかと思うと使用するのに腰が引ける。知人から「海外ではそんなの当たり前、そんなことでは生きていけないぞ」と諭されたが、結局、半年以上使えず今に至っている▼シャープといえば言わずと知れた家電メーカー。これまで培ってきた技術を活かし、社会状況の要請に応じてマスクを生産。一躍話題となった。今となっては送料を支払ってまで購入する必要はないが「目指してる、未来がちがう。」有り様につき購入してしまう▼届いたマスクの箱を眺めながら悦に入る。眺めているだけで「Be Original.」、「あなたのためのオリジナル」をつくり続けるというメッセージがいただけそう。メールボックスに一通のメールが届く。シャープからだ。また当選したとの報せ。マスクを購入してくれそうな顧客を再び当選させるとは。さすが、目の付け所がシャープだ。

(駐在教導 佐々木 大)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

「教区だより」 特別号 Vol.7

発行人 日野 隆文 (真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075 (351) 5260 Fax : 075 (351) 5256

発行日 2020 (令和2) 年11月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

